

第294回くらしの植物苑観察会 令和5年9月23日(土)

「日本の文化・歴史の中の半自然草原」

大津 千晶 (千葉県立中央博物館)

「半自然草原」という言葉をご存じでしょうか。日本で草原と呼ばれる植物群落は、成立する要因によっていくつかの種類に分かれます。例えば高標高域や強風が吹くなど、厳しい気候条件によって樹木が育たないために成立する草原群落や、芝生やゴルフ場など、人工的に草を栽培することで成立する草原群落があります。これらの草原とは異なり、草の刈り取り、火入れ、放牧などの人による活動によって成立する草原を「半自然草原」と呼びます。熊本県の阿蘇、長野県の霧ヶ峰などは雄大な草原景観を有する有名な観光地ですが、これらの草原も「半自然草原」に該当します。

半自然草原は伝統的な生業の中で成立しており、かつては暮らしに欠かせないものでした。そのため、半自然草原は日本国土の中でより広大な面積を占めていたと考えられています。万葉集に詠まれた秋の七草(オミナエシ、ススキ、キキョウ、ナデシコ、フジバカマ、クズ、ハギ)も半自然草原などの明るい環境を好む植物です。このことから、かつての日本人にとって草原の植物は親しみある存在であり、半自然草原は身近な景観であったことが伺えます。しかし、生活様式の変化に伴い、日本の半自然草原は現在ではごく一部の地域に残存するのみとなっています。

草原が急激に失われていく中で、草原を生育地とする植物の生残状況はどのように推移してきたのでしょうか。日本中部に残存する半自然草原を対象にした数十年間の調査からは、草原を生育地とする植物の近年の生残には、驚くことに100年近く前にその地域に広がっていた草原の面積が関わっていることが分かってきました。そして、近年増加しているニホンジカによる食害の影響も無視できないものになっていました。地域の人々の暮らしと関わって生きてきた草原の植物がどのような変遷をたどり、現在どのような生育状況にあるのかご紹介します。



スキー場に残存する半自然草原



キキョウ



カワラナデシコ

.....

次回予告 第295回くらしの植物苑観察会 令和5年10月27日(金)

「世界からみた日本の漆」

日高 薫 (当館情報資料研究系 教授)

13:30~15:30

くらしの植物苑 東屋 申込不要 定員30名